



読書活動への扉を開く！

No. R6-9

桑村小学校 令和6年9月3日 文責：関口 直

読書体験紹介 教員も学ぶ夏休み！

35日間の夏休みが終わり、子どもたちの元気な笑顔と声が学校に戻ってきました。9月は大きな行事はありませんが、その分、子ども主体のイベントも企画されています。1学期も最終月になったので、授業にもじっくり取り組み、しっかりと学んだことを身に付けてほしいと思っています。

さて、学校が夏休みということは、当然教員も夏休みでした。働き方改革が叫ばれていますが、子どもがいないときだからこそ、教員としての資質向上に集中できる大切な期間でもあります。最近「学校の先生は夏休みがあつていいね」などと言われることは、めっきり少なくなりました。教員も医者や法律家、芸能人と同じ専門職であり、最高のパフォーマンスを発揮する場合は授業であることから、そのための準備に十分時間を掛ける必要があります。教育公務員特例法の第21条には、「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。」と明記され、研修は教員の義務でもあります。そのため、夏休みは目の前の授業の準備だけでなく、先を見通して必要な研修を受けたり、授業者として人間的に成長するための教養を深めたりする機会でもあります。教員も子どもと同じで主体的な学びが大切であることに変わりありません。本校の萩原教諭は、夏休み後の学活で、子どもたちに自分が読んだ本を紹介していました。



- ・『孫子』(岩波文庫) ・『縄文文明』小名木善行
- ・『影響力の武器なぜ、人は動かされるのか』ロバート・B・チャルディーニ
- ・『学級手段づくりのゼロ段階』河村茂雄
- ・『子どもは罰から学ばない』ポール・ディックス
- ・『子どもの発達障害と感覚統合のコツがわかる本』前田智行

理科を専門とする萩原教諭ですが、教員としての資質向上を図る本だけでなく、広く教養を身に付ける本も読んでいます。読書指導に力を入れている学校であるからこそ、教員自身も様々なジャンルの本に接することは大切だし、そうした姿勢が引いては子どもの意欲を高める授業づくりにもつながっていきます。アウトドアにも熱心で、まさに体験活動と読書活動を身をもって結び付けている萩原教諭ですが、岩波文庫の「孫子」も読んでいたことには感心しました。

そんな自分ですが、この夏休みに読んだ本で一番印象深かったのは、『死の前、「意識がはっきりする時間」の謎にせまる「終末期明晰」から読み解く生と死とそのはざま』(アレクサンダー・バティアーニ)という本です。これは、認知症の人が、死の間際に自分を取り戻して、いろいろなことを語り出すという現象(これを終末期明晰といいます)、その謎に迫る本です。世界各地で報告されている事例を紹介しながら、科学的には考えられない魂の存在について、地道な調査によって明らかにしていきます。最終的に魂の存在証明はできませんでしたが、今後研究が進めば、私たちの世界観を大きく変えるような発見があるかもしれません。題名が少し長く、怪しい感じですが、決して宗教関係の本ではありません。私たちの多くは、唯物論でも、唯心論でもなく、やんわりとした心身二元論に近い考えをもっているように思います。それを終末期明晰という現象をもとに、科学的に証明していこうとする話の展開がとても興味深く、一気に読了してしまいました。みなさんは、どんな読書体験をされましたか？読んだ本をもとにいろいろな話ができることを期待しながら、引き続き読書活動を推進していきます。